

都會對主蠶農村問題

上田蠶絲專門學校教授
農學士 早川直瀨

往古にあつては人類は自給自足の經濟生活を送つて居つたが故に未だ交換經濟も起らず従つて都市の成立も見あかつたのである、然し經濟社會の進歩は窮なく物々交換に次では貨幣と云ふ交換媒介物が出る様になり進んでは信用經濟の時代を形成するに至り、商工業の著しき發展と共に國民經濟時代を完成し更に進んでは輓近に於けるが如く、世界經濟の時代を作り萬邦有無相通じ需給相應する様になつたのである。

而して此經濟發達の暗遷黙移は各種の方面に種々の影響を及ぼすに至つた、今から述べんとする都市對農村の問題の如きも全くその一つである。

蓋し遊牧時代の人類が土着するに當つて團體的の聚落を作つたものであるか、或は又三々五々即ち散在的に定住するに至つたのかは各議論が多い様ではあるが、遊牧時代から既に團體を形成して居つた點より云ふも、或は最も住居を構へ易き地を各自に欲する點より云ふも多くの場合は前者であつた事が想像せらるゝのである。而して如斯にして出來た聚落は所謂村落である、此村落の中に社會上或は經濟上

の影響に依つて都市が生ずるに至り、尙又た都市が生じたが爲に附近の村落が順次に發達するに至つたのである。

今都市對農村問題なる題目の下に於て主蠶農業地方とも云ふ可き長野縣小縣郡と及び其中心都市たる上田町との關係に就いて二三を述べる事とする。

抑都會とは如何なる所を名付くるかと云ふに「アダム・スミス」氏は都會に定義して「都會とは田舎に生産する食料の剩餘によりて生活する人の集合體あり」と云ひ「コンラッド」氏は三ツの標準を設けて之を説明した。

一、法律を以て制定したる行政上の區別。

二、住民の職業により農を營む者多ければ村落とす。

三、人口の疎密による區別。

本邦では市町村制があつて市町の多くは都會と稱す可く、村の殆ど總ては村落と解す可きであるが之は行政上の便宜から別けたものであつて、社會經濟の發達上生じたものが全々之であるとは云へぬ、例へば鹿兒嶋縣の村落の如きは人口萬以上のものゝ少くないが如きは此例である。

萬國統計會では人口二千以上の聚落を都會とすと決めてはあるが、之も其人口密度が問題となるものである、今自分は都會を極く漠然と密集村落の増大したものと云ふ事にして置く。

扱て如斯基都會は何が故に又如何にして成立したかと云ふ事について略述すれば、元來都市の成因は其根元が自然的あるものと人爲的あるものと二つとする事が出来る、先づ其前者から細別して説明する。

第一は要害の地に都會の發生せし事では外敵を防禦する便利上江流の濱山部の地等に都市を形成し城砦を設けたものであつて、之をAcropolis(山上の都府)と云ふ、本邦の多くの都市は封建時代に作られたAcropolisである。

第二は水陸要路に都會の發生せし事であつて、之を水運を利用する地方に於て生ずる水驛の如き、或は主要都府に通ずる大路の要點に生ずる驛亭の如きを云ふのである、此者は交通機關の變遷によつて、著しく消長するを免れぬ、彼の利根沿岸の水驛の衰亡の如き、或は碓氷の坂本、中山峠の中山、東海道の金谷等の如きは皆此例である。

第三は風光明媚温泉湧出等の地に都會を生せし事で説明を要せぬ所である。

第四は鑛山採掘地に都市を形成するものであつて、此種のもは其形成も速であるが、一旦鑛物の出方が少くなると忽ちにして衰退するものである、第五は物産の交換から出來たもので自給自足經濟から交換經濟に下つた當初は直接交換であつたが故に、勢ひ一定の時一定の所に於て交換希望者が集合する必要が生じた、其所で其の地方で最も都合のよい所で「市」なるものが發生する様にあつた、歐洲に於ける Wochenmärkte、Jahrmärkte、Massenの如き或は我國兩毛地方に於ける生絲又は絹物の一六とか三

八とか四九とかの市日の如きは之れである、而して如斯き日限り市が常市とあつて其所に都會を發生するのを常とするが、それは其地方の物産の多寡に大に關係する事は勿論である。

「アムステルダム」は鯉の上にたつ」と云ふ諺は之をあらはして居る。

以上は先づ其原因が大部分自然的なるものである。次に都市發達の原因が人爲的なるものとしては先づ第一主權者の意志に依るものであつて、例へば

「コンスタンチン」帝の「コンスタンチノープル」に於けるが如き、或は清盛の福原の都に於けるが如き家康の江戸に於けるが如き之れである。

第二は神社佛閣等參詣人の蝟集して淨財を投ずるが爲に出來た都會で、内外共に其例は少くない、善光寺の長野、稻荷の豊川、金刀比羅の琴平等は皆な之である。

第三は學校、兵營、軍港、官廳、工場等の公私立の大機關の設置の爲に其の附近を都會化するのである、之れは近時に於ける工業の地方分散の大勢上殊に著しきものである、例へば旭川、善通寺、吳等の軍事上の原因によつて出來た都市、或は九子町平野村(人口一萬二千二百五十五連擔戸數)等(千に餘り僅に都市を形成す)の製絲業に於けるが如きは之れである。

以上は都市の成因の極く概略であるが、此成因より又翻つて都市の發達並に衰退の原因を知る事が出来る事は勿論である。

孰れの都市にせよ其の成因は何であるかを究めて之れに依つて都市百般の劃策をたてねばならぬ事は自明の理である。

然らば吾上田町は其成因は何であつて、又如何なる現状にあるか先づ之を究めて然る後附近村落との關係に就いて研究の歩を進めなければならぬ、天平十一年に建てられた信濃國分寺は現今の上田町の郊外半里の地にある、思ふに現今の上田町は國分寺が建立せらるゝと共に既に多少の聚落を生じたのであらう、後戰國時代に於ては海野氏此附近に城砦を築き之を海野城と稱したと云ふが、之れが後世の上田城であるかは疑問である。

後天正十一年眞田安房守昌幸此地に城き下邑並に八村茲に成立し始めて都府の觀を作つたのである、眞田氏が在城三十餘年にして慶長年間破城を命ぜられ、後元和八年仙石氏再築城し、寶永三年松平伊賀守の居城とあり、明治維新に至る迄五萬三千石の封地であつたのである。

即ち上田町は其始めはAerobolisとして上田平を扣へ千曲の激流に濱し太郎の連山に據れる天險の地古今の名城として出來たものである。

宜なる哉秀忠の率ゆる三萬八千の大兵を迎へて力守して降らず、爲に關東の精英も敢て爲す事が出來なかつたのだ。

然し大平の瑞代となるや要害と云ふ事のみで上田町は成り立つ事が出來ないで、他に何等かの立場を

必要とするに至つた、茲に於て地勢上古くより行はれて居つた其養蠶を盛に行ふ様になり、遂には其特秀な氣候と良好な桑葉を基として蠶種製造を開始した、即ち寛文年間には此地から既に上武甲総の各國に蠶種を輸出するに至つたと云ふ。

蓋し養蠶と製絲とは密接な關係があつて、製絲を行つて甫めて養蠶の眞の利益を獲得し得るものである、殊に當時に於けるが如く一藩が經濟主體を形成して居る時に於て特に然りである、上田町は元來水の便が至つて乏しい地ではあるが其北半一圓には滾々として湧出する清水がある、此清水が當時の登せ絲(西京西陳の原料絲として當所より出でしもの)製絲の用水となつたのである、斯くて養蠶に次いで製絲が興り更に之に次いで絹織工業が行はるゝ様にあつた、即ち上田縞上田紬などの機織が之である。

上田を中心として附近村落で行はれた此等の産業を土臺として成立した當時の上田は誠に天下の上田であつて獨り信州の上田ではなかつたのである、即ち之は前述した都市の成因の第五に適合するもので換言すれば即ち當時の上田は「上田は蠶の上に立つ」であつたのである。

然し廢藩置縣と云ふ社會制度の變遷と交通機關の發達とは此の都府經濟時代を一舉にして國民經濟時代に入らしめた、遂に生絲は登せ絲を俊なくなり上田紬の外に米澤紬も得らるゝ様になり、群馬からも福島からも良蠶種を供給せらるゝ様になつた、依つて天下の上田も餘儀なく信州の上田となり小縣の上田とならざるを得なかつた、之れが即ち上田町の經過した歴史の極く概略である。

摺次には上田町の現状であるが先づ靜態人口を云へば次に表示するが如く十ヶ年間殆んど大なる増加を見ない。

年次	現住戸數	本籍人口	現住人口
三八	四、四七〇	一八、二〇四	二二、七六四
三九	四、五四九	一八、四八六	二二、七〇八
四〇	四、五八三	一八、六二〇	二二、九七四
四一	四、六九六	一九、三二八	二三、六六二
四二	四、七〇六	一九、四六九	二三、六七五
四三	四、七〇六	一九、七六六	二三、八五八
四四	四、七三九	一九、八八四	二三、九四二
四五	四、七九六	二〇、〇四二	二四、〇七五
二	四、八二八	二〇、六二三	二四、一九七
三	四、八五七	二一、二三九	二四、七七七

次に上田町に對する出入寄留に就て調査した所が他府縣から入れるものは新潟縣が一番に多く、富山縣之に次ぐ有様で、縣下から入れるものは小縣郡が最多で、埴科、北佐久、兩郡が之に次いで居る、次に寄留では他府縣は東京が最多で、神奈川、群馬之に次ぎ、縣下では小縣郡、長野市、北佐久郡が之に次ぐ有様で、結局出入口入人口に稍優る有様であるが故に町勢は現状維持と云ふ可き状態である。

斯く人口は二萬五千足らずであるが、上田驛（信越線上田驛 上田町の南端に在り）の到着貨物噸數を觀る時は他の同種の驛に比して頗る多大なるものがある、即ち

大正二年度上田驛主要貨物到着並發送噸數

品名	到着	發送	品名	到着	發送
米	五、六九八	一〇一	肥料		
麥	五〇二	六四	人造	三、〇九一	一七九
大豆	七三四	一五	豆粕	八四八	三二
食鹽	五三三		海產	二、五九七	二一五
砂糖	六四二	四	其他	一、八四九	三四五
煙草	一三二	三	繭	一、〇五〇	二、六八四
和酒	二六〇	三	生絲	六	二一七
洋酒	六二	三	絹布	二二	三一
			生皮葶	一	八四一

到着貨物は前表に示したるが如く多種多量であるが、發送貨物としては蠶絲生産物の外は殆んど擧ぐ可きものが無い、即ち上田驛は貨物の到着驛であり、上田町は是等の貨物を附近村落に分配する交易都市であるのである、即ち上田町は是等貨物の消費地である、小縣部に依つて立つて居る町である。

前表にて示せる上田驛よりの發送超過貨物たる繭生絲絹布生皮葶等の蠶絲生産物は直接間接皆小蠶郡の農家に依るものであり、到着超過となつて居る主要食物類は主蠶地方である、小縣郡の爲になつてゐる事であり大到着超過となつて居る各種の肥料類は桑園施用肥料として附近農村に分配せらるゝものであるが故に、現今の上田も「蠶の上に立つ」點に於ては昔に變らぬが、狭い小縣郡に對應する一農業都市に過ぎなくあつてしまつたのである。

序に大正二年に於ける小縣郡の主要物産を掲ぐれば次のきものがある。

品名	數量	價額	價額百分比%
蠶絲	一、九二〇、一九〇枚	七、〇六二、二九七	五二、二一
繭	一八八、一五〇石	八四七、二五八	六、二八
米	八七、二五八石	三、八七七、七五三	二八、五七
大小麥	六一、九九七石	一、七四五、一六〇	一二、九三
大豆	三、七二四石	五二四、九四〇	三、八九
桑苗	一、〇二二、九八五本	四四、六八八	〇、三三
藥用人參	一一、三二九斤	六、六三八	〇、〇五
工業物	—	一五、八六〇	〇、一二
生斗	一〇〇、六九二貫	六、四六七、九二四	四七、七九
熨斗	—	五、五〇一、〇七一	四〇、七五
生皮等廢物眞綿	—	二二七、七八一	一、三五
絹綿織物	二二、五三三反	六一、七一七	〇、四五
酒醬油味噌	—	六七七、三五四	五、〇〇
計	—	一三、五三〇、二二一	一〇〇、〇〇

以上述べた様の貨物の分配を受けて消費する農村の状態は如何様であるか以下其概畧を記述する。

「ホンのチューネン」氏は其名著孤立國に於て地理的狀態社會狀態經濟狀態が同一であるとする時、一都市を中心として同心圓の環内に於て各種の農業經營が行はるゝものである事を詳しい計算を基礎として立論したが、之れと同様に一都市を交易の中心となせる附近村落も若し地理的社會的經濟的狀態が各地

大差ないとすれば、同種の研究が行はる可きである然し上田を中心となせる村落に於ては各種の狀態が各異つて居るが故に甚だ不規則な分配の狀態を顯して居る、即ち上田から各主要村落に通ずる圓太郎馬車の線路に沿ふて「アミーバ」の様に上田市場の勢力範圍を示して居る、(尙交易の量に於ても異なる事は勿論である、之れは圓太郎馬車が因どかり果とあつて此經濟事情を導いたものである事は確であつて經濟學者の誠に面白い研究問題である。

小縣郡は四周皆か山を以て境せられ、中央に東西に亘つて千曲川が貫通し之れに郡の東南部に在る依田川が殆んど直角に流込んで居るが故に、山と川とを以て自ら川東川西依田窪の三部分に割せらる、而して川東には上田町外十一ヶ村、川西十一ヶ村、依田窪には丸子町(製絲業地)長窪新町同古町(中仙道の舊驛)の外八ヶ村ある、上田町を交易市場として居るのは此外地理的關係より隣郡埴科の南條村中條村及び更級郡の力石村村上村等である、但し小縣郡の中でも滋野村は地理上の關係から小諸町を交易市場とするが故に之を除く。

以下是等の村落の經濟事狀の大畧を掲げ進んで農村の消費問題の一端を披瀝する。

第一に土地利用狀態として耕地面積の歩合を觀るに此等の村落では三割四分七厘六毛を示して居る之は本邦民有々租地の土地利用率なる三割五分七厘よりも少いが、山地であるが故に止を得ぬ事である、殊に甚だしきは大門村の利用率であつて三分七厘を示して居る、利用率の最高は力石村の八割五分であ

つて其他五割以上ある村落は九ヶ村ある。

第二には農業組織の一として大、中、小、過小、農の割合を觀るに、全國割合に比し大農中農著しく少く、小農及過小農に於て勝る村として過小農の最高割合を示すは神川村の六割八分三厘であり、其他五割以上の過小農あるものが六ヶ町村ある。

大農(五町以上)	小縣村落	全 國	小縣村落	全 國
〇、四二五	一、二二三		四六、一四	三三、三六
中農(一町一五町)	一五、四〇	二九、八五	過小農(五反未滿)	三八、〇五
				三六、七九

第三には自作農小作農及兼營農の如何であるかと云ふに、之亦全國の割合と對照するに自作農が少く、小作農及自作小作兼營のものが多い事となつて居る。

自作農	小 縣	全 國	兼營農	小 縣	全 國
三〇、六八	三三、〇五		四二、三二	四〇、〇一	
小作農	二七、〇〇	二七、九四			

如斯く耕地利用の面積の少い事は地勢上養蠶業の發達を促す可く大農中農の割合が少く小農が著しく多い事も亦養蠶經營を多からしむる一因とある可きである蓋し大農は繁雜な養蠶經營よりも基礎的經營なる主穀農業を欲す可く過小農は労働は比較的過剩ではあるが、蠶室となる可き家居も能く且つ流通資本に缺乏して居るが故に、多くは蠶業労働者として他に雇傭せらるゝのを普通とするが故に、勢中農が小農が蠶業經營に最も都合がよいものであるからである。

如斯き經濟事情にある小縣郡農村の主なる生産業である養蠶業は如何であるかと云ふに、誠に長野縣蠶絲業の中心をなして居る事は次表を以つて明である。

	小縣郡	長野縣	長野縣に對し 小縣の割合	小縣郡	長野縣	長野縣に對し 小縣の割合
桑園反別	六、四三九	四、七五四	一四〇%	八八、二五〇	九二、八四三	一〇五%
養蠶戸數	一四、〇六六	二九、八六六	三、八〇%	(七三、四四六)持	(二、三六六)持	三、八〇%
掃立枚數	一三、〇七〇	八六、六三三	三、八〇%	(四〇、六三〇)普	(一、六四一)普	八、〇〇%
				九、六三三	一	
				生絲産額		

此數字は小縣全體のものであるが、上田を交易市場とあす三十一ヶ町村の數字を掲ぐれば次の如きものがある、但し之は春蠶のみに就いての數字である。

養蠶総戸數	一一、五三四戸	當一戸收繭額	二、四二二合
掃立蠶、量	一四二、六〇七匁	所得總金額	一、七〇九、五〇七圓
收繭總額	三六、五三一石	當一戸所得金額	一四八圓

所得金額一戸當の最高のもものは二百五十圓、最低のもの七十圓と云ふ數字を顯した之れは春蠶のみの所得であるが故に、尙夏秋蠶の所得を加へる時は誠に此地方では穀菽農業は副業であつて、養蠶が主業の觀を呈して居る。

斯る主蠶農村に於ても動もすると「入るを度つて出するを制する」と云ふ家計上の平衡を失ひ易いものである、之は養蠶に於ては短時間で而も一時的に多額の收入があるが故に經濟上甚しき放膽にゐるが爲であり、之が爲に養蠶地に於ける農家經濟の紊亂を招くのである、小さい例ではあるが養蠶期中廻つて

來る鱈魚商とか小間物屋其他の物品を掛け買ひして上簇後清算して以外に多くの費用の嵩みを觀るが如きは之である。

尙此等ばかりでなく養蠶が上簇するや否や恰も慰勞休暇とても云ふ様に村郎野嬢三々五々都會に出て其四旬の勞苦の一部を消費して行く、此期節とあると上田町あごにあつては盛に近郷近在に引札廣告を行ひ、各商店各特種の粧飾を施して客を呼ぶにつとめる事は歐米に於ける聖誕節の前の市の様である、茲に面白い事には此期節上田町で大きな紙幣で買物をする時は何處に行つても釣銭を得るに困難をする之は全く養蠶家が辛苦して得た繭の賣上金の大きな紙幣を以て市場の釣銭を農村に持つて行くからである。而して此の釣銭が少ければ少い程町は景氣が好いのである、此の農村へ持ち歸られた細い金錢は秋風が立ち雪が降ると共に順次に町に集つて來て貨幣の循環が終るのである。

而して如斯き状態は又直に都市の商買に特種の影響を及ぼすものである。

此一例として今上田町商工業者中販賣業者十戸以上のものを掲げる時は次の様である。

種類	戸數	種類	戸數	種類	戸數
吳服商	一七	繭絲商	三〇	古着商	一〇
米穀商	五八	(小間物化粧品商)	九	酒醬油商	二一
肥料商	二九	魚商	一九	紙商	一三
菓子商	一七	(金物商)	九	降鼻商	一七
藥種商	一四	其他	二二	計	三八四

前表の上欄のものは主として附近の農村を主なる得意として居るものである事は明である、而して是等の商賈の割合を他の都市のそれと比較する時は明に上田町は農業都市であると云ふ證明とある事であらう、他の例を持たぬのは遺憾の事である。

扱今より前述した上田驛到着多額の貨物をあゝに掲げた是等の商店で如何様に販賣するか、此問題に關して研究の歩を進むる事とする。

上田町に於て販賣する貨物の重なるものとしては肥料、金物、蠶具、魯類、藥種類、蠶網、米穀、酒類等であつて、此の中肥料が最も販賣範圍が廣く小縣郡一圓埴科更級南北佐久郡及群馬縣吾妻郡等に及んで居る、而して其殆んど大半は桑園の肥料として用ゐらるゝのである、其仕入先は綿粕は北海道、「硫酸アンモニア」は神戸、過燐酸石灰は東京、種粕は越後等で、其販賣の方法は大部分懸賣りで春蠶後其大半は回收せらるゝのを常とする。

肥料以外の貨物は殆んど小縣郡を其範圍として分配消費せらるゝものである、以上は上田町を中心として調査したものであるが、翻つて農村の方面より之を攻究するに次の如きものがある、之は上田町を交易市場とする農村二十九ヶ村に就て春蠶の所得の分配状態を調べたものである。

	金額	百分比
舊債償還	二〇二、六二二	一一、七五
負債利子	一九四、四五六	一一、二二

計	三九七、一二八	二二、九七
耕地購入	五七、九〇七	三、三六
肥料資金	五八〇、八四九	三三、七〇
種子種苗購入	四九、二七〇	二、八六
農具購入	三六、九〇八	二、一四
計	七二四、九三四	四二、〇八
家計補助	三三三、二五四	一九、三三
飲食費	二四七、〇四七	一四、三三
遊興費	二一、七三三	一、二九
一計	六〇二、〇三四	三四、九五
合計	一、七二四、〇九六	一〇〇、〇〇

不完全な表ではあるが此數字も亦養蠶家の消費問題の一部を語るものである、即ち負債及其利子に對し二割三分を費し生産的に四割二分を用ゆるが其大部分は流通資本として肥料に投せられ、耕地の購入乃至は農具の新調等の膨脹的の費用としては五に過ぎぬ、而も遊興費としての費目に對する金額も無いではない、是等を觀れば健全なる消費とは如何にしても稱する事は出来ぬ。

以上各種の事情を綜合するに上田町を貿易市場とする附近農村も他の主蠶農村と同じく、蠶業經營の餘弊を受けて居る事が少からぬ事を知るのである。

之れを例ふるに該地方農家一戸當りの負債額は平均百九十四圓で、本邦農家負債額平均百四十六圓に對し遙に大なる數であると共に其利子一割二分五厘と云ふ高率を示して居る、而も其負債たるや個人に

依るものが最も多く次では村落の小銀行によるもので、農工銀行勸業銀行産業組合等に依るものは比較的少ない、今該地方に於ける農村金融機關たる小銀行に就て調査した數字を列擧する時は次の如きものがある。

月次	貸附金高	同返済金高	預金高	同引戻高
一月	五九、九〇五、九〇〇	五四、〇五一、〇五五	二四一、四一五、一九三	九三、六六六、七五八
二月	八九、九六一、一六五	四四、二九五、三三五	六二、四六四、三〇五	一〇五、九二九、八七〇
三月	八八、四五二、四六一	六一、五七九、八二五	六九、七四七、九〇一	一〇四、五一〇、八二一
四月	八八、〇一七、七七五	八三、〇四九、九九〇	四四、七二五、二九三	五五、〇四一、四〇六
五月	八五、〇一五、四九三	七七、六一二、二八〇	三九、四六六、二六九	三七、五〇四、四七五
六月	二七、七六六、六二〇	九〇、三四三、〇三〇	六九、四六〇、五一〇	三五、二九四、二五五
七月	二〇八、五七四、六八〇	一四二、一四九、八五二	二五四、二一七、一〇四	七〇、九二九、四一〇
八月	八八、四〇五、八八〇	五一、〇〇九、一八二	七三、七五四、〇二七	六二、三六一、五三一
九月	九六、七九一、〇二〇	五二、九七二、三九五	一〇〇、三〇七、九一〇	七五、五七八、九二五
一〇月	一〇六、〇三八、三二〇	八四、七六九、五一一	九八、九六八、〇九三	八七、五三八、八四九
十一月	九二、九六九、八五〇	四五、九八六、六五九	五三、七二八、九五〇	五九、六二九、九一〇
十二月	一四一、一四四、〇二〇	一〇二、〇二〇、七〇三	一一、五一三、三七〇	二五〇、五五九、一六一

但し貸附に關するものは十五銀行、預金に關するものは十三銀行の調査合計なり何れも小縣郡内村落に所在する銀行なり

前表を通覽するに一般に貸附けは二月から五月迄が多く六月に至つて甚だ僅で七月に非常に多くあり、八、九兩月稍少く十一月兩月が殆んど同じ様で十二月が又多くの資金を要する事を示し、貸附金返還では三月より七月に至る迄は次第に多く、八、九兩月は稍少く十月より再増加の勢を示す、次に預金では

一月に多く二月より四月に至る迄は普通で、六月稍増加し七月に非常に多額に上り、八月より後半は前半に比し比較的多額に上つて居る、預金の拂戻しは一月より三月迄非常に多く後は平均の状態になり、年末に著しく増加して居る。

以上の貸附金は擔保貸附が最も多く(五割四分)信用之に次ぎ(三割八分)保證が最少である(八分)尙預金では定期が最も多く當座が之に次ぎ、小口當座最も少く通知別段手形預金手形預金等は殆んど數へるしか無い。

而して此等の金融状態を観るに何れも養蠶業と密接なる關係ある事を知る事が出来る。

前から述べて居る凡ての事を綜合するに養蠶業あるものは農業組織上特殊あるものであるが故に、之を經營する農家も其の農村も之に對しては十分の計畫を必要とするのである、若し然らずんば養蠶業の弊害のみ續出して「養蠶微りせば農村疲弊せざらましを」どの嘆聲を發するに至る可きは明である。

尙主蠶農村を貨物分配の大得意として居る都會は之れ亦十分に養蠶業なるものの性質を究めて之に適應する様に凡ての都市經營を行はねばならぬ。

西諺に「爾の農村を破壊する時は雜草は都會にも及ぶ可しされど農村健全なる時は如何に都會を破壊するとも恰も魔術によれるが如く復活す可し」

と云ふのがある、誠に然りであると今自分は蠶絲業に對する經濟學的の根本研究をなすには如斯き點

からする事も必要ではあるまいかと云ふ思ひつきから、主蠶農村として長野縣小縣郡をあげぬれど其の中心市場である上田町との關係に就いて如斯く略述した所以である。(完)

交雜種の生絲の織度に就きて

上田蠶絲専門學校教授
農學士 勝木喜董

蠶絲業の改良は必要である而して此改良に目的がなければならぬ、即ち如何なる方向に如何なる方法を取らねばならぬからである、たゞ盲目滅法に今迄より變りた事さへすれば改良だと思ふて居るものがあつたら笑止千萬或は改惡にあるかも知れぬ、さて此の改良の目的方法は色々あらう蟲の強いやうに雜種を作るもよい黄色の生絲が必要なら黄色の繭を作るやうな蟲を撰び之を飼育するもよい、要するに吾々の必要なのは蟲が強く而も生絲の質の良やうに改良する事が必要である蟲の事に就ては今は暫く措き生絲の事に就て考へれば抑も生絲のよいといふ事は如何なる事か光澤か感觸か將た色か是等は皆原始的の品質の定め方であつて生絲の品質定むべき主なる要素は生絲の織度并に強力及製品の整一である。

現今漸次斯業改良の方法も整頓の初歩に入りたやうであるけれども、いまだ此の大切ある織度の事に就て説くものは少ない、此の織度てふものは果して遺傳するものなりや否や雜種をすればごんな風に